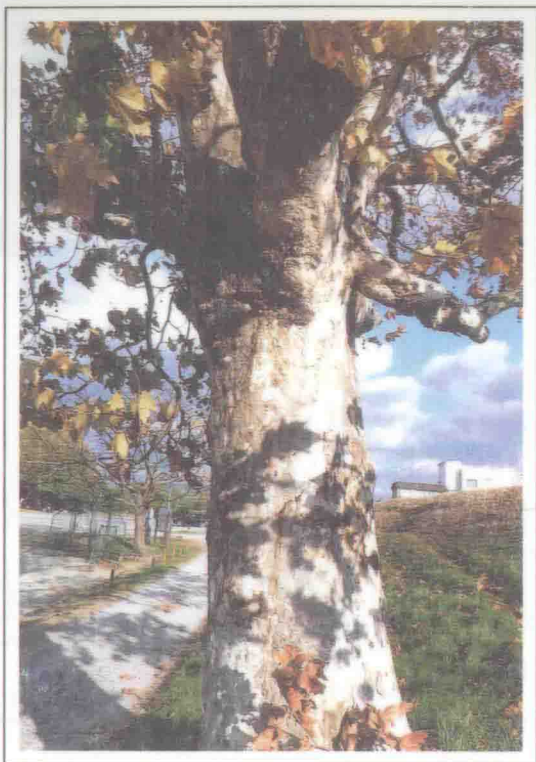


詩と文・評論

門林岩雄

Kadobayashi Iwao



生きる

竹林館

詩と文・評論

生きる

Kadobayashi Iwao

門
林
岩
雄

門林岩雄（かどばやし・いわお）

1934 年生まれ。大阪府和泉市出身。
京都府立医大卒。精神科医。

詩集 『火の鳥』（竹林館）
『梅園』（土曜美術社）
『花の下』（北溟社） 他 12 冊

詩と文・評論 『あなた』（竹林館）

新・日本現代詩文庫 63

『門林岩雄詩集』（土曜美術社出版販売）



日本詩人クラブ、日本ペンクラブ、関西詩人協会 各会員。

現住所 〒 619-0223 京都府木津川市相楽台 5-2-3

生きる

2015 年 4 月 10 日 第 1 刷発行

著 者 門林岩雄

発行人 左子真由美

発行所 (株) 竹林館

〒 530-0044 大阪市北区東天満 2-9-4 千代田ビル東館 7 階 FG

Tel 06-4801-6111 Fax 06-4801-6112

郵便振替 00980-9-44593 URL <http://www.chikurinkan.co.jp>

印刷・製本 (株) 国際印刷出版研究所

〒 551-0002 大阪市大正区三軒家東 3-11-34

© Kadobayashi Iwao 2015 Printed in Japan

ISBN978-4-86000-300-5 C0092

定価はカバーに表示しています。落丁・乱丁はお取り替えいたします。

生きる
——
目次

I 物語詩

生きる

5

II 詩

花 260

春の小川 260

土 261

彷徨 262

入相 262

春雨 263

若草山の夕餉

昼寝 264

264

たすけあい 264

石仏 265

舶来崇拜 265

初夏の夕べ 266

人形 266

村 267

山の頂 268

公園の隅 268

秋晴れの日 269

老人病院玄関前

一人暮らしの女の話 270

居間 271

青空 271

ゆめうつつ 272

うるめ 272

道のべの草 273 からだ 274

男 275

総括 276

自戒 276

Ⅲ 詩論

脚韻について

278

詩歌の韻律

290

詩歌の韻律（続）

296

短歌の魅力 — 下の句の銀律、銅律 —

302

牧水の歌の謎

308

自在四行詩論

314

Ⅳ エッセイ

相馬先生の思い出

322

相馬先生への手紙

324

あとがき

329

生きる
——
目次

I 物語詩

生きる 5

II 詩

花 260
春の小川 260
土 261

彷徨^{ほうこう} 262
入相 262
春雨 263

若草山の夕餉 263
昼寝 264

たすけあい 264
石仏 265

舶来崇拜 265
初夏の夕べ 266

人形 266
村 267
山の頂 268

公園の隅 268
秋晴れの日 269

老人病院玄関前 269
一人暮らしの女の話 270

居間 271
青空 271
ゆめうつつ 272

うるめ 272
道のべの草 273
からだ 274

男 275
総括 276
自戒 276

Ⅲ 詩論

脚韻について

278

詩歌の韻律

290

詩歌の韻律（続）

296

短歌の魅力 — 下の句の銀律、銅律 —

302

牧水の歌の謎

308

自在四行詩論

314

Ⅳ エッセイ

相馬先生の思い出

322

相馬先生への手紙

324

あとがき

329

I 生きる

登場人物

玄太一げん たいいち

陶芸家六代目

玄志野げん しの

玄太一の妻

飯屋宗八かりや そうはち

玄の友

飯屋俊子かりや としこ

飯屋宗八の妻

向坂美弥こうさか みや

向坂陶器店の出戻り娘

大鳥士郎おおとり しろう

元槍投げ選手

木之元華きの もとはな

飲み屋の女将

曾根山豪三そね やまごうざう

玄の弟子

上野庄造うえの しょうぞう

飯屋陶芸工房の番頭

今福達男いまふく たつお

行商人

宇都宮方斎うつのみや ほうさい

九州の陶芸家

宇都宮瑞枝うつのみや みずえ

方斎の妻

宇都宮紫音うつのみや しのぶ

方斎の娘

一

若い女が飯屋かりや陶芸工房とうげいこうぼうの前で 自転車を降りた
色白の大柄の美人である

「こんにちは」

「はい」

飯屋宗八かりやそうはちの妻の俊子としこが出てきた

「わたし 向坂美弥こうさかみみと申します

アルバイトとして お世話になりたいと思ってお邪魔しました
よろしく願います」

「ああ 向坂さん

主人から伺っております

わたし飯屋の家内の俊子です

こちらこそよろしく……

まあどうぞ こちらへ」

俊子は美弥を応接ソファへ案内し お茶を出した

「まあ

きれいな方！

お若いわねえ

今お幾つ？」

「二十七歳です」

「うらやましいわ

わたしより四つも年下

きれいなはず

お肌もつやつやしてるわ」

「いえいえそんな

奥さんこそ すらりとして

お上品」

「そんなことありませんよ

四人も子どもを産めば おばさんですわ」

「いえいえご謙遜を！」

持つて生まれたものは変わりませんわ
整った顔立ち スタイルの良さ」

「あなたこそ色白の美人
体もずいぶん大きいわねえ
身長何センチ？」

「一六九センチです」

「じゃあわたしより

三センチも高いわ」

「女はあまり図体がでかいと
生意気に見られて損しますわ」

「そうでしょうか」

でも今頃は 皆さん大きいですわねえ」

「それにこの頃 太ってきて困ります
服が合わなくなってきた……」

「そうなの？」

わたしあまり太らない体質なのかしら

気をつけてはいますが」

「むしろくしゃしてつい食べてしまいますの
悪いとわかっていながら……」

子連れの出戻りなので」

「この頃離婚が多いですわねえ

でもあなたほどの美人なら

いくらでも貰い手はあるでしょうに」

「姉には責められてますの

『早く再婚しろ』『早く再婚しろ』って……」

そんなこと言われても 好みがありますでしょう？ 女には

誰でもというわけにはいきませんわ」

「そうでしょうねえ

誰でもというわけにはわねえ」

そこへ俊子の末っ子がまとわりつく

「高志^{たかし}！

『こんにちは』は？」

子どもは顔を隠した

「今お幾つですか？」

「一歳三ヶ月

悪くて悪くて……

トコトコ自分で勝手に出歩くので困りますわ

この前も子猫を追っかけて溝にはまり

せつかく買ってやった新しい靴がドロドロ

靴くらいならいいんですけど

携帯は壊すわ オルゴールは壊すわ

昨日もこの子が前の晩寝なかったので

ソファでウトウトしていたら

何かふくらはぎがスースーしますの

なんとこの子が サインペンで落書きしてるんですから」

「オホホホホ

そうですの？」

「サインペンも この子の手の届かない机の上に置いたのに

いつの間にか 椅子を引っ張ってきてその上にのぼり

取るんですから」